



CASE

4

小中高を通じて個人のキャリア形成を支援する 「キャリア・パスポート」の実証実験に取り組む

福岡県教育委員会・糸島高校(福岡・県立)
奈良市教育委員会・一条高校(奈良・市立)

中央教育審議会答申(平成28年12月)において、「小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを記述し振り返ることができるポ

ートフォリオ的な教材「キャリア・パスポート(仮称)」の作成・活用」が提言された。※以下(仮称)は略。
「キャリア・パスポート」を活用して児童生徒が自ら振り返りを行うことで、

特別活動を中心としてつづ各教科等と往還しながら、主体的な学びに向かう力を育て、自己のキャリア形成に生かすのが狙いだ。
この全国的な展開に先駆け、文部科

学省は2017年度に福岡県と奈良市の2地域を指定し、今年度までの2年間で「キャリア・パスポート」普及・定着事業を実施している。事業に指定された2地域の教育委員会では、それぞれの地域性や教育方針に基づき、独自のポートフォリオ教材や活用方法を検討。一部の小学校・中学校・高校の参加による実践を交えながら、調査研究に取り組んでいるところだ。
今後、全国で実施が予定されている「キャリア・パスポート」。先行して始めた指定2地域では、それぞれどう取り組み、どんな効果が見込まれるのか。その最新状況を見ていきたい。

福岡県

子どもの可能性を伸ばす 県独自の「鍛ほめ福岡メソッド」を軸に 小中高が連携できるツールとして開発

福岡県教育庁
教育振興部
高校教育課



主任指導主事
古賀浩利氏



指導主事
堀 利治氏

振り返り重視の考え方を 小中高で一貫させる機会に

福岡県が「キャリア・パスポート」普及・定着事業」に手を挙げた背景には、県内小中高の教育の基盤とされている

「鍛ほめ福岡メソッド」がある。これは「鍛えて、ほめて、子どもの可能性を伸ばす」をコンセプトとし、目標設定・挑む・振り返る活動を繰り返すことで、子どもが自律的に成長するための原動力となる人格的資質を育成しよう

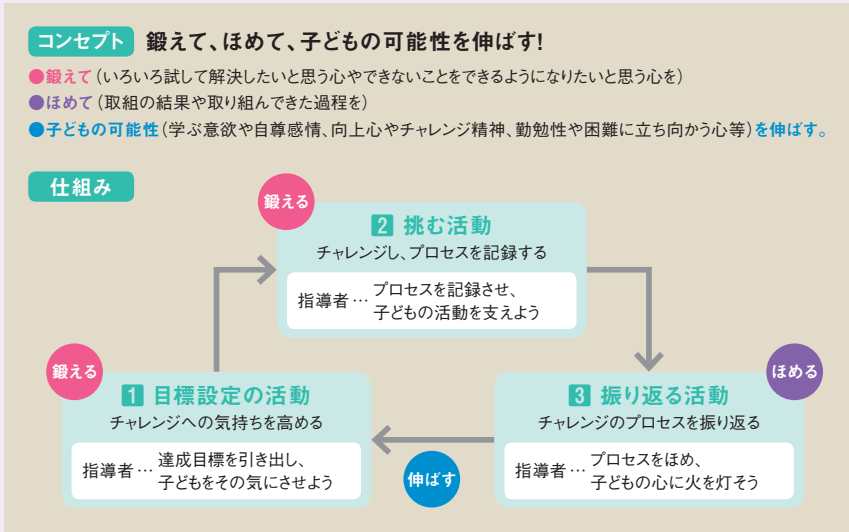
シンプルなツールと運用で 各学校現場になじみやすく

「学びのプロセスを記述し振り返る」キャリア・パスポート」の考え方は、「鍛ほめ」のコンセプトと重なります。本事業により、学校独自の「鍛ほめ」の実践を小中高の縦のラインで効果的につなげたいと考えています(主任指導主事・古賀浩利氏)

本事業には、同一地区内の小学校4校、中学校1校、高校3校が参加。福岡県版キャリア・パスポートとして「伊都っ子ノート」を作成し、昨年度後

半より各校での実践を始めた(図2)。「既に各校で取り組んでいるキャリア教育のプログラムがあるので、それを活かせる形にしたい」(指導主事・堀利治氏)と、「伊都っ子ノート」の内容とその運用をシンプルに設計している。「伊都っ子ノート」に取り組むのは、年度始めの目標設定と、年度末の振り返りの年2回。LHRや総合的な学習の時間にて、生徒はワークシートに沿って記入し、教員と保護者がコメントをつける。それをファイルに綴じ込み、それぞれのキャリア形成の参考にしていく。
昨年度の試行では、実践校から「生徒の変容がわかりやすくなった」との

図1 「鍛ほめ福岡メソッド」の概要



福岡県教育委員会の資料より作成

声も。保護者アンケートでは「子どもの成長を感じた」「子どもと将来のことについて話すきっかけになった」との回答が多数あった。今年度は実践校と共により効果的な方法を探っていく。「子どもたちが自分の成長を自分で実感でき、自ら成長できるようにするのが理想。そのための福岡県なりの仕組みを目指したいですね」(古賀氏)

実践校 糸島高校(福岡・県立)

オリジナルの手帳と「伊都っ子ノート」の併用で、生徒が自ら前へ進む後押しを

経験の振り返りが成長のカギ

このたび「キャリア・パスポート」普及・定着事業の実践校として指名を受けたことを、糸島高校はチャンスと捉えている。これを機に、懸案だったキャリア教育の充実に向けて前進できるとの期待があるからだ。

「成長のカギは、多様な経験をするだけでなく、そこから何を学び、今後どう活かしていくかを、生徒が自ら考えること。そんな振り返りの促進を、「伊都っ子ノート」でできればと考えています。また、小中高で連続性のある取り組みは従来にはないもので、中学校と前向きな連携ができる点にも魅力を感じています」(荒木礼子教頭)

「伊都っ子ノート」を昨年度終盤から導入し、今年度は初めて年間トータルで活用する。それに合わせ、同校は独自の補完ツールとしてオリジナルの手帳を作り、生徒に配布。双方を関連付けて運用を始めた。

生徒は年2回、総合的な学習の時間にて「伊都っ子ノート」に取り組む。まず、年度始めに、目指す進路と、その実現に向けた1年間の目標などを設定。例えば、ある生徒は、「心理カウンセラーになるために人文系のカ

大学に進学する」という進路希望や、「英検準2級取得」などの年度目標を記入した。そして年度末には、それらの目標の達成状況や、1年間で身に付いた力などについて振り返る。

一方の手帳は、生徒が日々持ち歩き利用するものだ。手帳には、タイムスケジュール欄に加え、これまで進路学習や学校行事などで配布していたプリント類の要素を集約している。生徒は毎日の予定の管理のほか、週間目標、学習時間、期末調査結果、進路学習や面談の内容などを記録。この手帳に日々蓄積された情報を年度末に見直し、「伊都っ子ノート」の振り返りに役立てる。

教員と保護者はコメントで激励

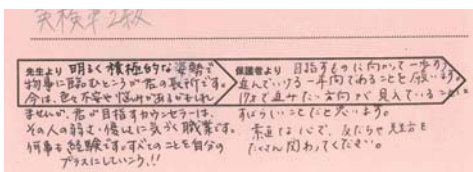
「伊都っ子ノート」の特長は、生徒が記入したものに、担任と保護者がそれぞれ、生徒が前向きになるコメントを書き入れることだ。担任は、進路に迷っている生徒には「一緒に考えていこう」と励まし、また、振り返りで「何もできなかった」という生徒には、まずそれに気付けたことを認め「次につなげよう」と促すなどしている。

保護者にコメントをもらうにあたっては、さまざまな家庭の事情を考慮して、依頼文書の配布のほか、今年度



右から、校長 松尾隆一先生、副校長 内田真司先生、教頭 荒木礼子先生、2学年担任 池谷康佑先生

「伊都っ子ノート」の教員と保護者からのコメント欄



「伊都っ子ノート」には担任・保護者のコメントがつけられる。保護者欄には、子どもに対する励ましや、「子どもの考えがわかって安心した」といった感想などが多い。「保護者コメントからは学校とは違う生徒の様子が垣間見え、生徒理解に役立つ」(2学年担任・池谷康佑先生)という。

生徒の挑戦の後押しに活かす

取り組み始めて間もないが、教員から「教員コメントなどを通じて生徒を深く見つける機会になっている」といった声があり、生徒理解の深まり



奈良市

これまでの小中一貫教育の連続性を
高校まで有機的につなげる
「運用方法のデザイン」に取り組む

編集・対話・内省のサイクルで
効果的な振り返りに

奈良市は2004年に小中一貫教育
特区認定を受け、15年度からすべての
市立小・中学校において中学校区ごと
の連携型あるいは施設一体型の一貫教
育を実施している。そうした関係性を
ベースとして、昨年度、奈良市教育委
員会および市立の小学校3校、中学校
2校、高校1校が協働し、「キャリア・パ
スポート」普及・定着事業に取り組み始
めた。

奈良市
教育委員会事務局
学校教育部
学校教育課



課長
ひがしはた
東 畑年昭氏

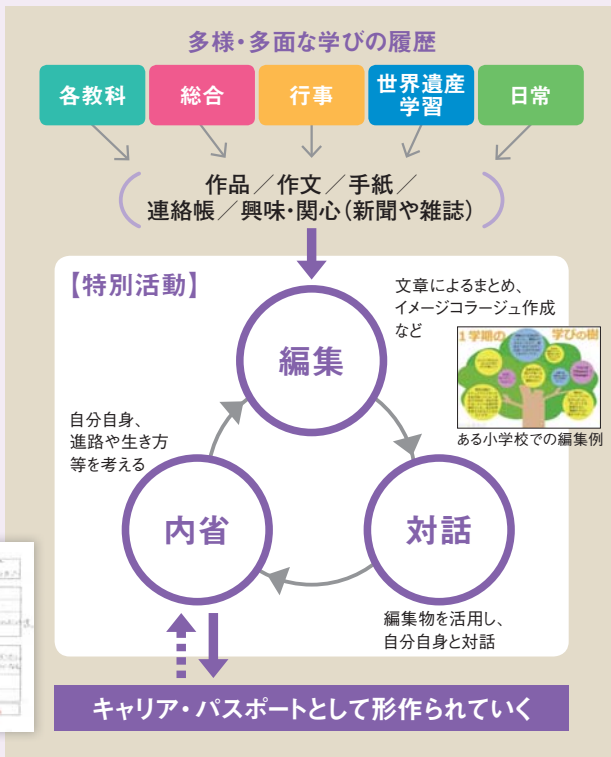


指導主事
中西利彦氏

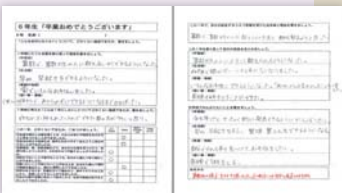
「奈良市キャリア・パスポートによって、
小・中で培ってきた連携を途切れさせ
ることなく、高校も含めた体系的なキ
ャリア教育を具現化し、自らの力でキ
ャリア形成できる若者を育てていきたく
い。その第1ステップとして、本事業では
高校1年生の時点で「自分と対話する
力」が身に付いている状態を目標に置
き、中・高の接続の部分に力を入れてい
きたいと考えています」(学校教育課課
長・東畑年昭氏)

奈良市の取り組みの特徴は、「どん
なワークシートにするか」より「どのよ

図3 奈良市キャリア・パスポートの目指すところ



奈良市キャリア・パスポート
(小学校での記入例)



奈良市教育委員会の資料より作成

図2 「伊都っ子ノート」



「伊都っ子ノート」のファイルに、学
年別に色分けされたワークシート
(各学年2~3枚)を綴じていく。各
校が独自に行っているキャリア教
育や進路学習のワークシートなど
を、学年シートの間に挟み込むこ
とも可能。

に手応えをもっているという。
「各生徒が学校行事などで挑戦し
たいことを前もって知ることができ
、そのチャンスがある際、生徒の背中
を押すことができます」(荒木教頭)

進路指導でも活躍しそうだ。

「生徒の進路に対する考えが早期に
把握でき、1学年の面談時から具体
的な話ができそうです。希望進路の
達成にもつながるでしょう」(松尾隆
一校長)

また、長期的な生き方を考えるき

つかけとしての期待も大きい。内田
真司副校長は「生徒が社会に羽ばた
く力にしていきたい」という。「新しい
ことは導入時が肝心」(荒木教頭)と
意義の理解、浸透を重視し導入した
本実践は、着実に進みそうだ。



図4 奈良市キャリア・パスポート(高校生用の項目) 「一年を見直し、振り返る」ワークシートの場合

年度始めに記入

- 1年のはじめに、自分のどんな力を伸ばしたいかを考えよう。
…人間関係形成・社会形成能力 / 自己理解・自己管理能力 / 課題対応能力 / キャリアプランニング能力 それぞれについて

年度末に記入

- 1年間を振り返って、一番心に残っていることをまとめよう。
…授業では / 行事では / 部活等では
- 1年間を振り返って、自分自身の成長をまとめよう。
- 将来の自分自身を想像しよう。
…1年後の私
どんなふうになっていたか / そのために今から何をするか
…30歳の私
どんなふうになっていたか / そのために今から何をするか
- 保護者からのメッセージ / 先生からのメッセージ

※このほか、学期ごとのワークシートもある

次のような展開の授業に取り組んだ。
まず、生徒は教科や学校行事などのさまざまな学びの履歴を集めて、1つの制作物に圧縮・整理する「編集」に取り組む。例えば、ある小学校では昨年度その学期の学校生活で印象に残ったことを、学びの大きさに合うサイズのカードに書き出し、大樹のイラストに貼って「学びの樹」を制作した。このような編集物をもとに自分自身と「対話」し、進路や生き方を問いかける「内省」を深める。最後に、キャリア・パスポートのワークシートを用い、学期(学年)始めに立てた目標の振り返りや、自分の成長についてまとめるという流れだ(図3)。

小中高の相互理解が
今後の地域の強みに

です。そこで、分散している学びの履歴を1カ所に集めて編集することで、対話・内省をしやすいし、効果的な振り返りにつなげたいと考えています(指導主事・中西利彦氏)

小中学校の実践を踏まえ、今年度は高校での取り組みも始まった。昨年度から実践校は定期的集まり、キャリア・パスポートに関する協議を行ってきた。そのなかで、小中学校でのキャリア教育の内容が高校に知られていないことや、中学校と高校では重点を置く資質・能力が異なっていることなどがわかり、情報交換を進めてきた。

「これまで接点のなかった小中学校と高校の教員が一堂に会して話すことで、お互いの理解が進んだことは、現時点での最大の成果といえます。この関係性は、地域の教育の大きな強みになっていくでしょう」(中西氏)
まだ検討すべき課題もあるが、「課題を洗い出すことから必要な対策が見えてくる」と東畑課長は前向きだ。「子どもたちは社会で生きていくなかで壁にぶち当たることもあるでしょう。そんな時、学校時代に自分に向き合いたったことを教員や保護者が認めてくれたという記録であるキャリア・パスポートが心の支えになり、前に進む力になったら嬉しいですね」(東畑氏)

実践校 一条高校(奈良・市立)

日々の記録をデジタル化して蓄積し
振り返りの頻度を高めていく

進路指導での活用に期待

奈良市キャリア・パスポートの実践校、一条高校は奈良市で唯一の市立高校として人気のある進学校だ。同校には従来より独自のポートフォリオ的な教材がある。生徒はこれに、入学時には「幼少時からの生活史」「長所・短所」「将来の職業の希望」などを記入して提出し、各学年末には1年間の振り返りを追記。通常は職員室で保管し、進路指導などの際に有益な生徒資料として活用されてきた。奈良市キャリア・パスポートは、その拡大版として有効だと期待される。



写真右から
教頭 成松 亨先生、
副校長 錦 秀知先生、
進路指導部部长 岡本 浩先生

中学校までの記録はデジタル化して同システムへ吸収。高校での日々の活動を記録していくとともに、市教委から示された項目(図4)をシステム上に設定して学期ごとに振り返りを行い、ポートフォリオを形成していく予定だ。

「定期的に現在の課題や過ごし方を考えるきっかけにしてほしい」(進路指導部部长・岡本浩先生)

現在は、日々の学習時間の記録や、進路講演会の振り返りなどでの活用が始まったところだ。内容チェックが手軽なため、生徒の記録に対し毎日コメントを返す担任もいる。

「効率的なツールを使うことで個別の対話を充実させ、生徒一人ひとりの良さを伸ばしていきたいですね」(錦秀知副校長)

生徒との対話の充実へ

同校はキャリア・パスポートの実践ツールとして、折から検討を進めていた高大接続改革での主体性評価への対策を兼ね、今年度、ポートフォリオ機能を備えたシステムを導入した。